狢

田中貢太郎

青空文庫

幕末の話である。

某商人が深更に赤坂の紀の国坂を通りかかった。左は紀州邸の築地塀、右は濠。そして、濠の向うは彦根藩邸の森々たる木立で、深更と言い自分の影法師が怖くなるくらいな物淋しさであった。ふと濠傍の柳の木の下にうずくまっている人影に気づいた。

どうやら若い女のようで、悄然と袂に顔をうずめて泣いているのであった。商人はてっきり身投げ女だと思った。驚かさないようにして女の傍へ寄って往った。

「どうかしたのかい、姉さん。狭い量見を起しちゃいけないよ」

女は顔もあげないでしくしくと泣きつづけた。商人は寄り添って腰をかがめた。

「ね、どうしたんだい。姉さん思案にあまることがあるなら、いくらでも力になってやるよ、わけを言って見な」

女はますます袂へ顔をうずめて泣き入るばかりであった。商人はじれったくなって女の肩へ手をかけた。

「どうしたのだ、姉さん、人が親切に言ってるのだ、わけを言ったらいいじゃないか」

女はひょいと袂から顔をあげた。それは目も鼻も何もないのっぺら坊であった。

「わ」

商人は一声叫ぶなり坂を四谷の方へ逃げあがった。あがったところに夜鷹蕎麦の灯があった。

商人は鞴のような呼吸と同時にその屋台へ飛びこんだ。
「大変だ、大変だ」
「どうなすったかね」
もやもやと立つ湯気の向うにいる親爺はつまらなさそうに言った。
「どうもこうもありゃしねえ、そこで大変な代物に衝っ突かったんだい」
「追剝にでもお会いなすったかね、当世珍らしくもねえ話だ」
「馬鹿にするな、追剝ぐらいで江戸っ児が騒ぐかい。妖怪に会ったんだい、大変な顔をしてやがったのだ」
「へ、大変な顔、どんな大変な顔でござんした」
「それがおめえ、恐ろしいの何のって、とても一口にゃ言えやしない」
「こんな顔じゃなかったかね」
親爺はぴしゃりと額を一つ打つなり湯気の間から顔を出した。目も鼻も何もないのっぺら坊だった。
商人は気を失った。その頃紀の国坂一帯には狢が数多棲んでいて、よく悪戯をしたと言われている。

青空文庫情報

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　1999（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年8月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狢

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/